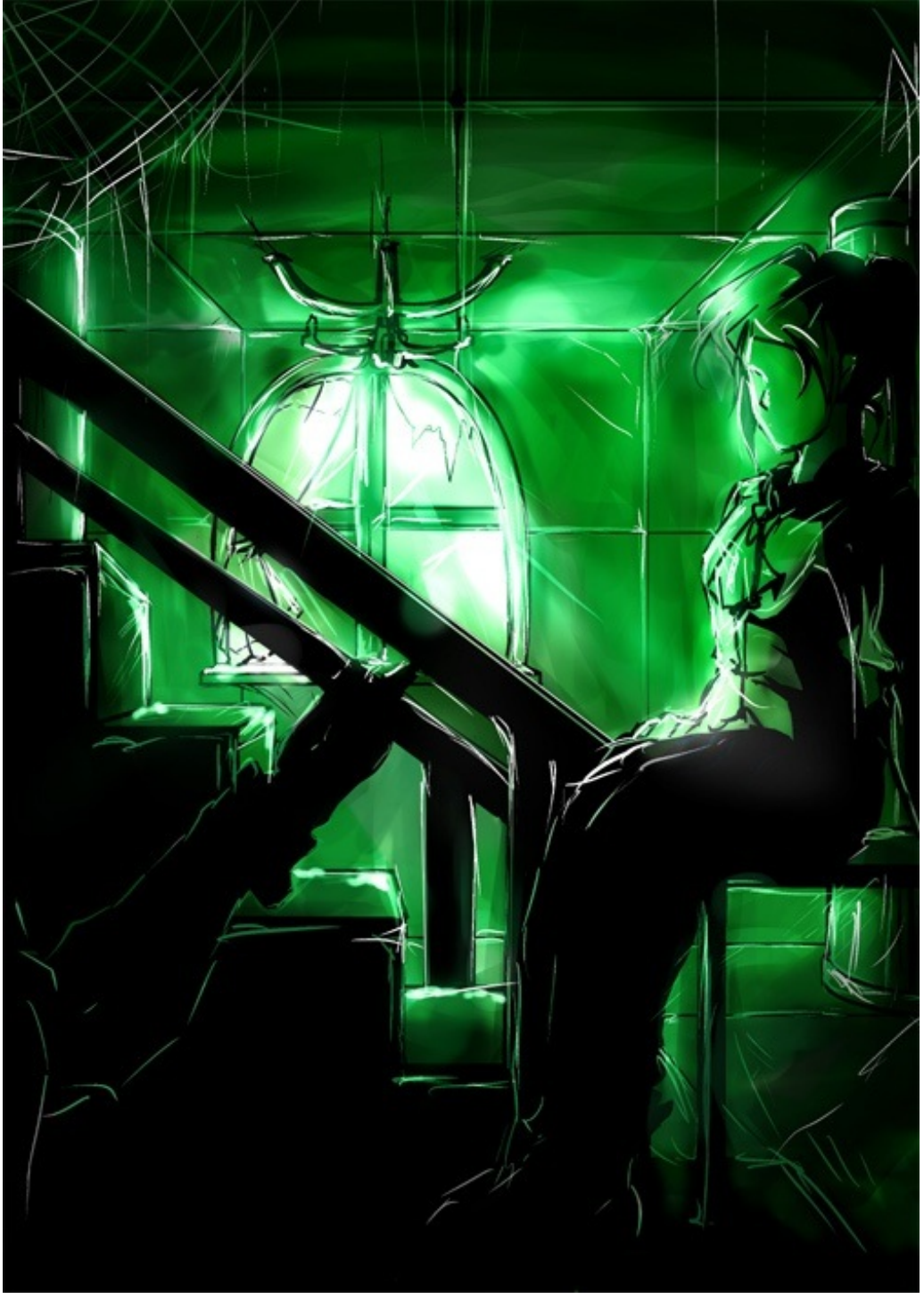

ゆめくい

夢を食うという妖怪がいる。
それは悪夢を食ってくれるのか、ただ見てる夢を食うのか、それともその人の目標を食うのか知らない。

さみしいバクは歩き続ける。
平成の世はみな悪夢だらけ、バクは人の夢に浮かぶものがどろどろとした得体のしれないものに、うんざりしていた。
可愛い子供のもとに行っても、数年後に尋ねれば死んだ目をしている。
　たとえば楽しく走り回る人の夢はとてもさわやかで甘くておいしい。
金銭欲、嫉妬、狂気にまみれた夢は最初は癖になるけれど、食べすぎれば吐きたくなる。
一度食べた夢は消化されてもうはきもどされることはないけれど。
　ネオンの街中、人の姿をしたバクは歩き続ける。
ふらりと立ち寄った寂れたアパート。
誰かが泣いている声がした。
バクは人の姿から戻って、その中に入っていく。
　泣いているのは一人暮らしを始めたばかりの女性。
周りに段ボールが所狭しと積んでおり、投げ出された洋服。
この子は今日はなにかがうまくいかなかったのかな。
　簡易ベッドで泣きながら眠る彼女の夢を、バクは覗いてみた。
恋人と別れ、家を離れ、さみしいさみしい。
彼女は真っ暗な場所でひざを抱えてうずくまる。
　バクはその夢をもぐもぐ食べた。
夢は徐々に薄れ、若干粘りを帯びた液体のようなものがのどを流れる。
悪夢を食いつくすと、彼女は少しほっとした顔に戻って、泣きやみ、眠る。

次の日もその子のもとを訪れた。
　バクは彼女の見る悪夢を食い続けた。
季節が変わって、またさみしい夜は何度も訪れる。
バクはひたすら食べる。
いろんな夢を食べてきた。
　富を見る人間の夢、ささやかな名声を得たいだけの夢、子供のころの夢、悪夢。
彼女が見るのはずっと恋人と家族の夢だった。
冷たい恋人、突き放す手、ネオン街に去っていく後ろ姿。家族の顔は夢の中ではまるで砂嵐のように見えない。
おいしいなんて全く思わないけれど、夢を食べることで、悪夢が途切れて安心した顔に戻る彼女

の顔を見るのが、バクは見ているのが好きだった。
　そうしてまずくどろ臭い夢を食べ続けた。

数年がたった。
　彼女は立派に会社で働いていた。相変わらず悪夢は見るけれど、それをバクは食い続けた。
そのころには狭い部屋もだいぶ片付き、女の子らしいものが置かれるようになっていた。
ある日彼女が見た夢はとても楽しそうな夢だった。
　好きな相手ができたのだろうか、バクの知らない男性と手をとって歩くだけのかわいらしい夢。
その夢はとても美味しそうだったが、食べるのをやめた。
ある日から彼女は夜遅くまでずっと働いた。
　帰ってこない日もあった。バクは人には見えない。彼女の部屋の片隅で体を横たえていた。
部屋には写真が増えた。
夢の中の男性との写真が増えて行った。
バクは思う。きっと彼女はこれから幸せな夢を見る。そしてそれは現実となる。
それはただのバクとしての予感だった。
　彼女の夢は、幸せと光に満ちたものになった。おそろいのリング、公園でのデート。
それに合わせて、部屋は荷づくりの準備が始まっていた。

ある日バクは朝方に目を覚ました。
寝ている彼女の夢をのぞき見ようとしたが、見ることができなかった。
　なぜ見られないのかと身を乗り出す。
眠っているはずの彼女は息をしていなかった。そばには睡眠薬が大量に落ちていた。
そしてベッドの下には、ガラスが割れた、男性とたのしそうに笑顔で写る写真立てが落ちていた。

おいしい料理は栄養もある。
かびた料理は毒となる。
　バクも同じで、ずっと悪夢だけを食べればどうなるだろう。
バクは悪夢を食べすぎた。
彼女は幸せな夢を見すぎた。
バクは最後に彼女のそばに寄り添って、そのまま二度と目を覚まさなかった。

終

ゆめ喰い

http://p.booklog.jp/book/57627

著者 : 香吾悠理(エビル)
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/yuuri15/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/57627

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/57627

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ